

平成18年度畜産大賞受賞

山口型放牧研究会



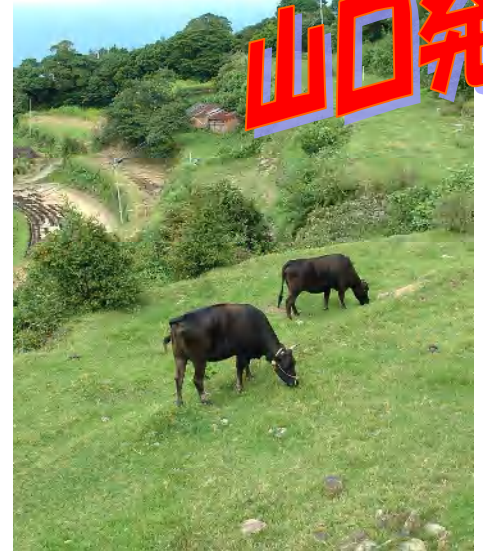
放牧維新が日本を変える!

▼中央畜産会主催 選定理由で将来性を絶賛▼

近年、急増している耕作放棄地、荒廃農地の活用手段として肉用牛放牧に着目し、全国に先駆けて水田利用による肉用牛の放牧方式を確立したこと、最近いわれるところの「日本型放牧」の原型を作り出したことにあります。ご承知のように、耕作放棄地、転作田等の水田を利用した放牧は、山口県を発信地としていま全国に広まってきております。

農地の保全、農地の有効利用といった農業生産領域にとどまらず、地域の景観維持や環境保全といったことからきわめて有効な手段として注目されてきております。耕作放棄地、荒廃農地の増大は、いうまでもなく日本農業の衰退につながるものでありまして、それを防止し、活用する方策を確立することは、現在もっとも重要な課題といっても言い過ぎではありません。

この事例の長年にわたる経験を通じて築き上げられた放牧システムや普及推進の手法・体制は、その課題に対して有効な指針を提示するものといえます。まさに時代の要求に相應る畜産による地域振興の活動事例として大賞に値するものと評価しました。



「農業・環境・地域が蘇る 放牧維新」刊行

吉田 光宏 著 家の光協会発行



いつでも、どこでも、だれでも、簡単に
「よろず効果」生む牛の力

新しい放牧は、農業分野でのコスト削減や省力化、農地保全といった「一石数鳥」だけでなく、農村の景観や文化の保全、自然保護や環境教育、地域文化、「食」の安全、癒しや安らぎ、人間と動物の福祉など、さまざまな領域への波及効果が期待できる。

スローライフ、オーガニック、動物福祉、食の安全・安心、ロハス（健康と環境、持続可能な社会生活を心がける生活スタイル）

「もったいない」など現在注目を集めている用語がどれも新しい放牧と関連付けることができる。「2007年問題」である団塊世代の定年退職者にも活躍の場を提供するだろう。昔、日常生活に必要なものが何でもそろった「よろず屋」があったのを見ると、数多の問題を解決する放牧に「よろず効果」があると訴えたい。

山口型放牧のキャッチフレーズは「いつでも、どこでも、だれでも、簡単にできる」。畜産大賞受賞はこの新しい放牧の限らない可能性をはっきり証明したのだ。



山口型放牧の“効能”

- 肉用牛の低コスト生産 ●耕作放棄地の解消 ●景観保全 ●地域社会の連携強化 ●イノシシなどの獣害防止 ●草原の生物多様性維持 ●食の安全安心 ●人と動物の癒し ●環境教育 ●食料安全保障 ●その他多数…み～んな格安の費用でOK

メディアも注目

「荒れた農地モ～再利用」(毎日新聞)★「荒れた農地牛が草刈り 飼育費減らし景観保全」(朝日新聞)★「荒地の草食べさせ農地復元牛の放牧で『一石二鳥』 手間掛からず安価」(中国新聞)★「牛の放牧がブーム 荒地の解消めざす」(日本農業新聞)★「モ～雑草生やさない」(山口新聞)★天声人語(朝日新聞)でも取り上げられました

モ一人間の手には負えない 牛に任せろ

あなたが都会暮らしのサラリーマンだったら、自分で牛を放牧しようなんて想像したこともないだろう。農業者でも経験がなければ、ちょっと考え込んでしまうはずだ。土地や牛が必要だし、何よりも体重数百キロもある生き物をどうやって世話するのか。「面白そうだが、自分自身で牛を飼うとなると話は別だね…」。こんな返事が予想できるのだが、「牛と縁のなかった人でも牛を放牧することができますよ!」と言い切れる新しい放牧が出現した。うそだと思われる方は、おいでませ、山口へ。そして、各地で「舌刈り」に精を出している牛たちをとくごとくご覧あれ。

農業者の高齢化や過疎化で荒れるままだった田畑が放牧できれいになった、イノシシなどの野生動物の被害が少なくなった、放牧した牛の糞に子

どもが平気で触った、介護施設のお年寄りたちが放牧を見て心を和ませた、放牧に生きがいを見出した定年退職者がいる、ゴルフ場で「草刈り中」の牛が人気者になった…。

いずれも「山口型放牧」の実施例だ。山口型放牧とは1989年、全国に先駆けて山口県で始まった水田放牧事業と、それが進化した移動放牧事業の2本柱からなる新しいスタイルの放牧だ。最近、「小規模移動放牧」、「水田・里山放牧」などとして全国で普及し始めた移動式の小規模放牧は「日本型放牧」と総称されるが、その原型は山口県で創られたのである。

耕作放棄地解消や農業活性化には、高齢化や過疎といった壁が立ちわだかまっている。労働コストが高い人間の手にはもう負えないのだ。あとは牛の舌刈り能力に任せるしかない。(まえがきに加筆)

放牧で元気 環境と人



だれでもできます

移動放牧普及のため、各地で研修会が開かれる。電気柵や水飲み場の設置は簡単だ

いざ出動！

山口県畜産試験場のレンタカウが耕作放棄地へ。大好物のクズをどんどん平らげる



わー、牛がいた

山で放牧中の牛を探しながら子どもたちが環境学習。牛の糞などの物質循環を学ぶ



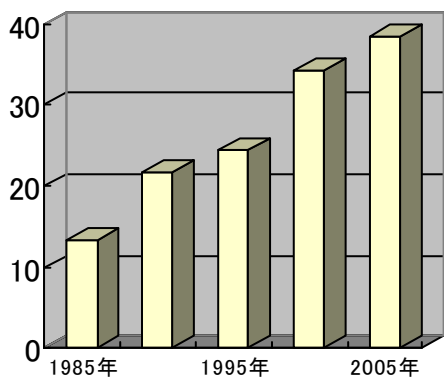
人も牛も癒される
お年寄りと子牛の交流。笑いとお
らぎのある時間が流れる



じゅうたんの草地
長年の放牧でみことなシバ草地に
なった牧場。以前は水田だった



耕作放棄地面積の推移(単位万ha)



全国の耕作放棄地は38万ヘクタール。これは埼玉県と同じ広さ



(C)Mitsuhiro YOSHIDA 2007